

駈込み訴え

太宰治

申しあげます。申しあげます。だんな様。あの人は、ひどい。ひどい。はい。嫌なやつです。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かしておけねえ。

はい、はい。落ち着いて申しあげます。あの人を、生かしておいてはなりません。世の中の敵です。はい、何もかも、すっかり、全部、申しあげます。私は、あの人の居所を知っています。すぐにご案内申します。ずたずたに切りさいなんで、殺してください。あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたった二月遅く生まれました。大した違いがないはずだ。人と人との間に、そんなにひどい差別はないはずだ。それなのに私は今日まであの人に、どれほど意地悪くこき使われてきたことか。どんなに嘲弄されてきたことか。ああ、もう、嫌だ。耐えられるところまでは、耐えてきたのだ。怒るときに怒らなければ、人間のかいがありません。私は今まであの人を、どんなにこっそりかばってあげたか。誰も、ご存じないのです。あの人ご自身だって、それに気がついていないのだ。いや、あの人は知っているのだ。ちゃんと知っています。知っているからこそ、なおさらあの人は私を意地悪く軽蔑するのだ。あの人は傲慢だ。私から大きに世話を受けているので、それがご自身に悔しいのだ。あの人は、あほうなくらいにうぬぼれ屋だ。私などから世話を受けている、と

いうことを、なにかご自身の、ひどい引けめでもあるかのように思いこんでいなさるのです。

あの人は、なんでもご自身でできるかのように、人から見られたくてたまらないのだ。ばかな話だ。世の中はそんなものじゃないんだ。この世に暮らしてゆくからには、どうしても誰かに、こぺこ頭を下げなければいけないのだし、そうして歩一歩、苦勞して人を抑えてゆくよりほかにしようがないのだ。あの人にいったい、何ができましよう。なんにもできやしないのです。私から見れば青二才だ。私がおしおらなかつたらあの方は、もう、とうの昔、あの無能でとんまの弟子たちと、どこかの野原でのたれ死にしていたにちがいない。「きつねには穴あり、鳥にはねぐら、されども人の子には枕するところなし。」それ、それだ。ちゃんと白状していやがるのだ。ペテロに何ができますか。ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、トマス、こけの集まり、ぞろぞろあの人について歩いて、背筋が寒くなるような、甘ったるいお世辞を申し、天国だなんてばかげたことを夢中で信じて熱狂し、その天国が近づいたなら、あいつらみんな右大臣、左大臣にでもなるつもりなのか、ばかなやつらだ。その日のパンにも困っていて、私がいり繰りしてあげないことには、みんな飢え死にしてしまうだけじゃないのか。私はあの人に説教させ、群衆からこっそり賽銭をまきあげ、また、村の物持ちから供物を取り立て、宿舎の世話から日常衣食の購求まで、煩をいとわず、してあげていたのに、あの方はもとより弟子のばかどもまで、私にひと言のお礼も言わない。お礼を言わぬどころか、あの方は、私のこんな隠れた日々の苦勞をも知らぬふりして、いつでも大変なぜいたくを言い、五つのパンと魚が二つあるきりのときでさえ、目前の大群衆皆に食物を与えよ、などと無理難題を言いつけなかって、私は陰に苦しいやり繰りをして、どうやら、その命じられた食い物を、まあ、買い調えることができるのです。いわば、私はあの人の奇跡の手伝いを、危ない手品の助手を、これまで幾度となく務めてきたのだ。

5 【さいなむ】しつこく苦しめる。
9 【嘲弄】相手をばかにしてからかうこと。

6 【青二才】年が若く、経験の乏しい人。男性に対して用いられる。
6 【とんま】まぬけてあること。

9 【ペテロ】イエス・キリストに選ばれた十二人の弟子の一人。直後のヤコブ、ヨハネ、アンデレ、トマスも同様。
9 【こけ】考えが足りないこと。

14 【購求】買い求めること。

私はこう見えても、決して吝嗇りんしやくの男じゃない。それどころか私は、よっぽど高い趣味しゆみ家かなので。私はあの人を、美しい人だと思っている。私から見れば、子供のように欲がなく、私が日々のパンを得るために、お金をせせとためたっても、すぐにそれを一厘りん残さず、無駄むだなことに使わせてしまつて。けれども私は、それを恨うらみに思いません。あの方は美しい人なのだ。私は、もともと貧しい商人ではありませんが、それでも精神家しんけんかというものを理解していると思つています。だから、あの方が、私の辛苦しんくしたためておいた粒りゅうりゅう々の小金を、どんなにばかりも無駄むだづかいしても、私は、なんとも思いません。思いませんけれども、それならば、たまには私にも、優しい言葉の一つくらいはかけてくれてもよさそうなのに、あの方は、いつでも私に意地悪くしむけるのです。一度、あの方が、春の海辺をぶらぶら歩きながら、ふと、私の名を呼び、「おまえにも、お世話になるね。おまえの寂さびしきは、わかつている。けれども、そんなにいつも不機嫌ふきげんな顔をしていては、いけない。寂さびしいときに、寂さびしそうな面持ちおももちをするのは、それは偽善ぎぜん者のすることなのだ。寂さびしさを人にわかってもらおうとして、ことさらに顔色を変えて見せているだけなのだ。まことに神を信じているならば、おまえは、寂さびしいときでもそしらぬふりして顔をきれいに洗い、頭に油を塗ぬり、ほほえんでいなさるがよい。わからないかね。寂さびしさを、人にわかってもらわなくても、どこか目に見えないところにいるおまえの誠まことの父だけが、わかっている。さつたなら、それでよいではないか。そうではないかね。寂さびしきは、誰だれにだってあるのだよ。」

20

います。誰だれよりも愛しています。ペテロやヤコブたちは、ただ、あなたについて歩いて、何かいいこともあるかと、そればかりを考えているのです。けれども、私だけは知っています。あなたについて歩いて、なんの得するところもないということを知っています。それでいながら、私はあなたから離はなれることができません。どうしたのでしょうか。あなたがこの世にいななくなったら、私もすぐに死にます。生きていくことができません。私には、いつでも一人でこっそり考えていることがあるんです。それはあなたが、くだらない弟子でしたち全部から離はなれて、また天の父のお教えとやらを説かれることもおよしになり、つつましい民たみの一人として、お母のマリヤ様と、私と、それだけで静かな一生を、長く暮らしてゆくことであります。私の村には、まだ私の小さい家が残つてあります。年老いた父も母もおります。ずいぶん広い桃畑ももばたけもあります。春、今頃いまごろは、桃ももの花が咲いてみごとであります。一生、安楽にお暮らしてきます。私がいつでもおそばについてご奉公ほうこう申しあげたく思います。よい奥様おくさまをおもらいなさいまし。そう私が言ったら、あの方は、薄うすくお笑いになり、「ペテロやシモンは漁人うなどりだ。美しい桃ももの畑はたけもない。ヤコブもヨハネも赤貧せきひんの漁人うなどりだ。あの人たちには、そんな、一生を安楽に暮らせるような土地が、どこにもないのだ。」と低く独り言のようにつぶやいて、また海辺を静かに歩き続けたのですが、後にも先にも、あの人と、しみりお話しできたのは、そのとき一度だけで、あとは、決して私にうちとけてくださいることがなかった。私はあの人を愛している。あの方が死ねば、私も一緒に死いっしょぬのだ。あの方は、誰だれのものでもない。私のものだ。あの人を他人に手渡てわたすくらいなら、手渡てわたす前に、私はあの人を殺してあげる。父を捨て、母を捨て、生まれた土地を捨てて、私は今日まで、あの人について歩いてきたのだ。私は天国を信じない。神も信じない。あの方の復活も信じない。なんであの方が、イスラエルの王なもののか。ばかな弟子でしどもは、あの人を神のお子だと信じていて、

20

1 【吝嗇】ひどくけちであること。
1 【趣味家】利益などを考えず、好きなことをしている人。趣味人。
3 【厘】貨幣の単位。一円の一〇〇〇分の一。
5 【精神家】物質の満足よりも精神の修養を重んじる人。

7 【マリヤ】イエスの母。マリア。
12 【シモン】イエス・キリストに選ばれた十二人の弟子の一人。
12 【漁人】漁師。
13 【赤貧】きわめて貧しいこと。
20 【イスラエル】旧約聖書で、神に選ばれたとされている民族の名前。また、イスラエル人が建国した王国。

15

そうして神の国の福音とかいうものを、あの人から伝え聞いては、あさましくも、欣喜雀躍している。今にがっかりするのが、私にはわかっていきます。己を高うする者は低うせられ、己を低うする者は高うせられると、あの人には約束なさったが、世の中、そんなに甘くいってたまるものか。あの人はずつきだ。言うこと言うこと、一から十まででたらめだ。私はてんで信じていない。けれども私は、あの人を美しきだけは信じている、あんな美しい人はこの世にない。私はあの人を美しさを、純粋に愛している。それだけだ。私は、なんの報酬も考えていない。あの人について歩いて、やがて天国が近づき、そのときこそは、あっぱれ右大臣、左大臣になってやろうなどと、そんなさもしい根性はもっていない。私は、ただ、あの人から離れたくないのだ。ただ、あの人をそばにいて、あの人を聞き、あの人を眺めておればそれでよいのだ。そうして、できればあの人に説教などをよしてもらい、私とたった二人きりで一生長く生きていてもらいたいのだ。あああ、そうだったら！ 私はどんなに幸せだろう。私は今の、この、現世の喜びだけを信じる。次の世の審判など、私は少しも恐れていない。あの方は、私のこの無報酬の、純粋の愛情を、どうして受け取ってくださらぬのか。ああ、あの人を殺してください。どんな様。私はあの方の居所を知っております。ご案内申しあげます。あの方は私を卑しめ、憎悪しております。私は、嫌われております。私はあの方や、弟子たちのパンのお世話を申し、日々飢渴から救ってあげているのに、どうして私を、あんなに意地悪く軽蔑するのでしょうか。お聞きください。六日前のことでした。あの方はベタニヤのシモンの家で食事をなさっていたとき、あの村のマルタの妹のマリヤが、ナルドの香油をいっぱい満たしてある石ころのつぼを抱えて饗宴の室にこっそり入ってきて、だしぬけに、その油をあの方の頭にぎぶと注いでお足までぬらしてしまって、それでも、その失礼をわびるどころか、落ち着いてしゃがみ、マリヤ自身の髪

20

15

の毛で、あの方のぬれた両足を丁寧に拭いてあげて、香油の匂いが室に立ちこもり、まことに異様な風景でありましたので、私は、なんだか無性に腹が立ってきて、失礼なことをすると、その妹、娘にどなってやりました。これ、このようにお着物がぬれてしまったではないか、それに、こんな高価な油をぶちまけてしまって、もったいないと思わないか、なんとというおまえばばかなやつだ。これだけの油だったら、三百デナリもするではないか、この油を売って、三百デナリもつけて、その金をば貧乏人に施してやったら、どんなに貧乏人が喜ぶかしのれない。無駄なことをしては困るね、と私は、さんざん叱ってやりました。すると、あの方は、私の方をきくと見て、「この女を叱ってはいけない。この女の方は、大変いいことをしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまえた方には、これからあとと、いくらでもできることではないか。私には、もう施しができなくなっているのだ。そのわけは言うまい。この女の人だけは知っている。この女が私の体に香油を注いだのは、私のとむらいの備えをしてくれたのだ。おまえた方も覚えておくがよい。全世界、どここの土地でも、私の短い一生を言い伝えられるところは、必ず、この女の今日のしぐさも記念として語り伝えられるであろう。」そう言い結んだときに、あの方の青白い頬は幾分、上気して赤くなっていました。私は、あの方の言葉を信じません。例によっておおげさなお芝居であると思ひ、平気で聞き流すことができましたが、それよりも、そのとき、あの方の声に、また、あの方の瞳の色に、今までかつてなかったほどの異様なものが感じられ、私は瞬時とまどいして、さらにあの方のかすかに赤らんだ頬と、薄く涙に潤んでいる瞳とを、つくづく見直し、はっと思いあたることがありました。ああ、いまわしい、口に出すさえ無念至極のことでありませう。あの方は、こんな貧しい女に恋、ではないが、まさか、そんなことは絶対にないのですが、でも、危ない、それに似た怪しい感情を抱いたのではないか？

20

15

10

5

1 【福音】キリスト教において、深い罪をもつ人間がイエス・キリストによって救われるという知らせ。

1 【欣喜雀躍】うれしくてたまらず、踊りあがって喜ぶこと。

17 【ベタニヤ】パレスチナ地方の都市であるエルサレム近郊の地名。ベタニア。

18 【マルタの妹のマリヤ】マルタとマリヤはベタニヤに住む姉妹で、イエスと親しかった。

18 【ナルドの香油】ナルドは高山地帯の植物。ナルドから精製される香油は非常に高価なものだった。

19 【饗宴】客人をもてなすための盛大な宴会。

5 【デナリ】貨幣の単位。

19 【無念至極】このうえなく残念であるということ。

あの人もあろう者が。あんな無知な女に、そよとても特殊な愛を感じたとあれば、それは、なんとという失態。取り返しのできぬ大醜聞。私は、人の恥辱となるような感情を嗅ぎ分けるのが、生まれつき巧みな男であります。自分でもそれを下品な嗅覚だと思ひ、嫌であります。あつとひとめ見ただけで、人の弱点を、あやまず見届けてしまふ鋭敏の才能をもっております。あの人が、たとえ微弱にでも、あの無学の女に、特別の感情を動かしたということは、やっぱり間違いありません。私の目には狂いがなければだ。確かにそうだ。ああ、我慢ならない。堪忍ならない。私は、あの人も、こんな体たらくでは、もはやだめだと思ひました。醜態の極みだと思ひました。あの人はこれまで、どんなに女に好かれても、いつでも美しく、水のように静かであつた。いささかも取り乱すことがなかつたのだ。ヤキがまわつた。だらしがねえ。あの人が、しかも、あの二人より二月遅く生まれてゐるのだ。若さに変わりはないはずだ。それでも私は耐えている。あの一人に心をささげ、これまでどんな女にも心を動かしたことはないのだ。マルタの妹のマリヤは、姉のマルタが骨組み頑丈で牛のように大きく、気性も荒く、どたばた立ち働きのだけがとりえて、なんの見どころもない女であります。あれは違つて骨も細く、皮膚は透きとおるほどの青白さで、手足もふっくらして小さく、湖水のように深く澄んだ大きい目が、いつも夢見るように、うっとり遠くを眺めていて、あの村では皆、不思議がつてゐるほどの気高い娘でありました。私だつて思つてゐたのだ。町へ出たとき、何か白絹でも、こっそり買つてきてやろうと思つてゐたのだ。ああ、もう、わからなくなりました。私は何を言つてゐるのだ。そうだ、私は悔しいのです。なんのわけだか、わからない。じだんだ踏むほど無念なのです。あの人が若いなら、私だつて若い。私は才能ある、家も畑もある立派な青年です。それでも私は、あ

2 【醜聞】悪い評判。スキャンダル。
7 【体たらく】みっともない
ありさま。
9 【ヤキがまわる】年をとるなどして、技術や判断力が衰える。

の人のために私の特権全部を捨ててきたのです。だまされた。あの人は、うそつきだ。だんな様。あの人は、私の女をとつたのだ。いや、違つた！ あの女が、私からあの人を奪つたのだ。ああ、それも違つた。私の言うことは、みんなてたらめだ。ひと言も信じないでください。わからなくなりました。ごめんくださいまし。ついつい根も葉もないことを申しました。そんなあさはかな事実など、みじんもないのです。醜いことを口走りました。だけれども、私は、悔しいのです。胸をかきむしりたいほど、悔しかつたのです。なんのわけだか、わかりませぬ。ああ、ジェラシイといふのは、なんてやりきれない悪徳だ。私がこんなに、命を捨てるほどの思ひであの人を慕ひ、今日まで付き従つてきたのに、私には一つの優しい言葉もくさらず、かえつてあんな卑しい女の身の上を、お頬を染めてまでかばつておやりなされた。ああ、やっぱり、あの人にはだらしがない。ヤキがまわつた。もう、あの人には見込みがない。凡夫だ。ただの人だ。死んだつて惜しくはない。そう思つたら私は、ふいと恐ろしいことを考えるようになりました。悪魔に見込まれたのかもしれない。そのとき以来、あの人を、いっそ私の手で殺してあげようと思ひました。いづれは殺されるおかたにちがいない。またあの人だつて、無理に自分を殺させるように仕向けてゐるみたいな様子が、ちらちら見える。私の手で殺してあげる。他人の手で殺させたくはない。あの人を殺して私も死ぬ。だんな様、泣いたりしてお恥ずかしゅう思ひます。はい、もう泣きませぬ。はい、はい。落ち着いて申しあげます。その明るく日、私たちはいよいよ憧れのエルサレムに向かい、出発いたしました。大群衆、老いも若きも、あの人のもとに付き従ひ、やがて、エルサレムの宮が間近になつた頃、あの方は、一匹の老いぼれたるばを道端で見つけて、微笑してそれに打ち乗り、これこそは、「シオンの娘よ、恐れるな、見よ、なんじの王はるばの子に乗りて来りたもう。」と予言されてあるとおりのかたちなのだと、弟子たちに晴れがましい顔を

6 【ジェラシイ】やきもち。ジェラシー。
19 【シオンの娘】「シオン」はエルサレムを、「娘」は人々をたとへた表現。

して教えました。私一人は、なんだか浮かぬ気持ちでありました。なんという、哀れな姿であつたでしょう。待ちに待った過ぎ越しの祭り、エルサレム宮に乗り込む、これが、あのダビデのお子の姿であつたのか。あの人の一生の念願とした晴れの姿は、この老いぼれたるばにまたがり、とぼとぼ進む哀れな景観であつたのか。私には、もはや、憐憫以外のものは感じられなくなりました。実に悲惨な、愚かしい茶番狂言を見ているような気がして、ああ、もう、この人も落ちめだ。一日生き延びれば、生き延びただけ、あさはかな醜態をさらすだけだ。花は、しばまぬうちこそ、花である。美しい間に、切らなければならぬ。あの人を、いちばん愛しているのは私だ。どのように人から憎まれてもいい。一日も早くあの人を殺してあげなければならぬと、私は、いよいよこのつらい決心を固めるだけでありました。群集は、刻一刻とその数を増し、あの人を通る道々に、赤、青、黄、色とりどりの彼らの着物を放り投げ、あるいは棕櫚の枝を切つて、その行く道に敷きつめてあげて、歓呼にどよめき迎えるのでした。かつ前に行き、あとに従い、右から、左から、まつわりつくようにして果ては大波のごとく、ろぼとあの人を揺さぶり、揺さぶり、「ダビデの子にホサナ、褒むべきかな、主の御名によりて来る者、いと高きところにて、ホサナ。」と熱狂して口々に歌うのでした。ペテロやヨハネやバルトロマイ、その他全部の弟子どもは、ばかなやつ、既に天国を目の前に見たかのように、まるで凱旋の將軍に付き従っているかのように、有頂天の歡喜で互いに抱き合い、涙にぬれた接吻を交わし、一徹者のペテロなど、ヨハネを抱きかかえたまま、わあわあ大声でうれし泣きに泣き崩れていました。そのありさまを見ているうちに、さすがに私も、この弟子たちと一緒に艱難を冒して布教に歩いてきた、その忍苦困窮の日々を思い出し、不覚にも、目頭が熱くなってきました。かくしてあの方は宮に入り、ろばから降りて、何思ったか、繩を拾いこれを振り回し、宮の境内の、両替えする者

20

の台やら、はと売る者の腰掛けやらを打ち倒し、また、売り物に出ている牛、羊をも、その繩のむちでもって全部、宮から追い出して、境内にいるおおぜいの商人たちに向かい、「おまえたちみな出てうせろ、私の父の家を、商いの家にしてはならぬ。」と甲高い声でどなるのでした。あの優しいおかたが、こんな酔っぱらいのような、つまらぬ乱暴をはたらくとは、どうしても少し気がふれているとしか、私には思われませんでした。そばの人も皆驚いて、これはどうしたことでですか、とあの人に尋ねると、あの人息せき切って答えるには、「おまえたち、この宮を壊してしまえ、私は三日の間に、また建て直してあげるから。」ということだったので、さすが愚直の弟子たちも、余りに無鉄砲なその言葉には、信じかねて、ぼかんとしてしまいました。けれども私は知っていました。しょせんはあの人、幼い強がりにちがいない。あの人信仰とやらでもって、万事成らざるはなしという氣概のほどを、人々に見せたかったのにちがいないのです。それにしても、繩のむちを振り上げて、無力な商人を追い回したりなんかして、なんて、まあ、けちな強がりなんでしょう。あなたにできる精いっぱい反抗は、たったそれだけなのです。か、はと売りの腰掛けを蹴散らすだけのことなのですか、と私は憫笑してお尋ねしてみたいとさえ思いました。もはやこの人はだめなのです。破れかぶれなのです。自重自愛を忘れてしまった。自分の力では、このうえも何もできぬということはこの頃そろそろ知り始めた様子ゆえ、余りポロの出ぬうちに、わざと祭司長に捕らえられ、この世からおさらばしたくなってきたのでありましょう。私は、それを思ったとき、はつきりあの人を諦めることができました。そうして、あんな気取り屋の坊ちゃんを、これまでいちずに愛してきた私自身の愚かきをも、容易に笑うことができました。やがてあの方は宮に集まる大群の民を前にして、これまで述べた言葉のうちでいちばんひどい、無礼傲慢の暴言を、めちやくちゃんに、わめきちらしてしまつたのです。さ

20

2 【過ぎ越しの祭り】ユダヤ教の祭日。

2 【ダビデ】イスラエル王国（ヘブライ王国ともいう）の王。紀元前一〇世紀頃の人。

5 【茶番狂言】その場にあるものを使い、身振りで滑稽なことを演じる劇。

10 【棕櫚】うちわの骨のような形の葉をもつ常緑高木。

13 【ホサナ】ヘブライ語で「どうか救ってください」という意味。

14 【バルトロマイ】イエス・キリストに選ばれた十二人の弟子の一人。

15 【凱旋】戦いに勝利して本拠地に帰ること。

16 【有頂天】うれしくて気分が舞い上がっている様子。

16 【接吻】「キス」の古い言い方。

16 【一徹者】自分の考えなどを最後まで押し通す人。

18 【艱難】ものごとをやり遂げるまでに経験する、つらくて苦しいこと。

8 【無鉄砲】結果を考えず、むやみに物事を行うこと。

13 【憫笑】哀れみの気持ちで笑うこと。

16 【祭司長】宗教上の祭典を執り行う祭司の長。

よう、確かに、やけくそです。私はその姿を薄汚くさえ思いました。殺されたがって、うずうずしていやがる。「災いなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、なんじらは杯と皿との外を清くす、されども内は貪欲と放縦とにて満つるなり。災いなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、なんじらは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまさまの汚れとに満つ。かくのごとくなんじらも外は正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満つるなり。蛇よ、まむしの末よ、なんじらいかで、ゲヘナの刑罰を避け得んや。ああエルサレム、エルサレム、予言者たちを殺し、遣わされたる人々を石にて打つ者よ、めんどりのそのひなを翼の下に集むるごとく、我なんじの子らを集めんとせしこと幾度ぞや、されど、なんじらは好まざりき。」ばかなことです。噴飯ものだ。口まねするのさえ、いまわしい。大変なことを言うやつだ。あの人は、狂ったのです。まだその他に、飢饉があるの、地震が起こるの、星は空より落ち、月は光を放たず、地に満つ人の死骸の周りに、それをついばむわしが集まるの、人はそのとき嘆き、歯がみすることがあろうだの、実に、とんでもない暴言を口から出まかせに言い放ったのです。なんという思慮のないことを、言うのでしよう。思い上がりも甚だしい。ばかだ。身のほど知らぬ。いい気なものだ。もはや、あの人の罪は、免れぬ。必ず十字架。それに決まった。

祭司長や民の長老たちが、大祭司カヤパの中庭にこっそり集まって、あの人を殺すことを決議したとか、私はそれを、昨日町の物売りから聞きました。もし群衆の目前であの人を捕らえたならば、あるいは群衆が暴動を起こすかもしれないから、あの人と弟子たちとだけがいる所を見つけて役所に知らせてくれた者には銀三十を与えるということをも、耳にしました。もはや猶予のときではない。あの人は、どうせ死ぬのだ。他の人の手で、下役たちに引き渡すよりは、私が、それをなそう。今日まで私の、あの人にささげた一筋なる愛情の、これが最後の挨拶だ。私の義

務です。私があの人を売ってやる。つらい立場だ。誰がこの私のひたむきの愛の行為を、正當に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は純粹の愛だ。人に理解してもらうための愛ではない。そんなさもしい愛ではないのだ。私は永遠に、人の憎しみを買うだろう。けれども、この純粹の愛の貪欲の前には、どんな刑罰も、どんな地獄の業火も問題でない。私は私の生き方を生き抜く。身震いするほどに固く決意しました。私は、ひそかによきおりを、うかがっていたのであります。いよいよ、お祭りの当日になりました。私たち師弟十三人は丘の古い料理屋の、薄暗い二階座敷を借りてお祭りの宴会を開くことにいたしました。みんな食卓に着いて、いざお祭りの夕餉を始めようとしたとき、あの人は、つと立ち上がり、黙って上衣を脱いだので、私たちはいったい何をお始めなさるのだろうと不審に思っているうちに、あの人は卓の上の水がめを手に取り、その水がめの水を、部屋の隅にあった小さいたらいに注ぎ入れ、それから純白の手巾を自身にまとい、たらいの水で弟子たちの足を順々に洗ってくださったのであります。弟子たちには、その理由がわからず、度を失って、うろろろするばかりでありましたけれど、私には何やら、あの人の秘めた思いがわかるような気持ちでありました。あの人は、寂しいのだ。極度に気が弱って、今は、無知な頑迷の弟子たちにさえすがりつきたい気持ちになっているのにちがいない。かわいそうに。あの人は自分の逃れがたい運命を知っていたのだ。そのありさまを見ているうちに、私は、突然、強力なおえつが喉に突き上げてくるのを覚えた。やにわにあの人を抱きしめ、ともに泣きたく思いました。おうかわいそうに、あなたを罪してなるものか。あなたは、いつでも優しかった。あなたは、いつでも正しかった。あなたは、いつでも貧しい者の味方だった。そうしてあなたは、いつでも光るばかりに美しかった。あなたは、まさしく神のお子だ。私はそれを知っています。お許しください。私はあなたを

2 【パリサイ人】ユダヤ教の一派。
3 【放縦】かって気ままで、だらしない様子。
4 【まむし】毒蛇の一種。
5 【ゲヘナ】キリスト教における地獄。
6 【噴飯もの】余りにばかげていて、思わず吹き出してしまふようなこと。
7 【カヤパ】ユダヤ教の大祭司。
8 【銀三十】銀貨三十枚。

8 【夕餉】「夕食」の古い言い方。
9 【手巾】手拭い。ハンカチ。

売ろうとしてこの二、三日、機会を狙っていたのです。もう今は嫌だ。あなたを売るなんて、なんという私は無法なことを考えていたのでしょうか。ご安心なさいまし。もう今からは、五百の役人、千の兵隊が来たとしても、あなたのお体に指一本触れさせることはない。あなたは、今、つけ狙われているのです。危ない。今すぐ、ここから逃げましょう。ペテロも来い、ヤコブも来い、ヨハネも来い、みんな来い。我らの優しい主を守り、一生長く暮らしてゆこう、と心の底からの愛の言葉が、口に出しては言えなかったけれど、胸にわきかえっておりました。今日まで感じたことのない一種崇高な霊感に打たれ、熱いおわびの涙が気持ちよく頬を伝って流れて、やがてあの人は私の足をも静かに、丁寧に洗ってください、腰にまどってあった手巾で柔らかく拭いて、ああ、そのときの感触は。そうだ、私はあるとき、天国を見たのかもしれない。私の次には、ピリポの足を、その次にはアンデレの足を、そうして、次に、ペテロの足を洗ってください。順番になったのですが、ペテロは、あのように愚かな正直者でありますから、不審の気持ちを隠しておくことができず、主よ、あなたはどのように私のお洗いなされるのです。と多少不満げに口をとがらして尋ねました。あの人は、「ああ、私のすることは、おまえには、わかるまい。あとで、思いあたることもあるだろう。」と穏やかに言い論じ、ペテロの足もとにしゃがんだのだが、ペテロはなおも頑強にそれを拒んで、いいえ、いけません。永遠に私の足などお洗いなすってはなりません。もったいない、とその足を引っ込めて言いました。すると、あの人は少し声を張りあげて、「私でもし、おまえの足を洗わないなら、おまえと私とは、もうなんの関係もないことになるのだ。」とずいぶん、思いきった強いことを言いましたので、ペテロは大慌てに慌て、ああ、ごめんなさい、それならば、私の足だけでなく、手も頭も思う存分に洗ってください、と平身低頭して頼みいりましたので、私は思わず吹き出してしまい、他の弟子たちも、

7 【崇高】とりわけ優れている。高い。

10 【ピリポ】イエス・キリストに選ばれた十二人の弟子の一人。

20 【平身低頭】身をかがめ、頭を深く下げて恐れ入ること。

そっとほほえみ、なんだか部屋が明るくなったようでした。あの人も少し笑いながら、「ペテロよ、足だけ洗えば、もうそれで、おまえの全身は清いのだ、ああ、おまえだけでなく、ヤコブもヨハネも、みんな汚れない、清い体になったのだ。けれども。」と言いかけてすっと腰を伸ばし、瞬時、苦痛に耐えかねるような、とても悲しい目つきをなされ、すぐにその目をぎゅっと固くつぶり、つぶったままです。みんなが清ければいいのだが。」はっと思った。やらされた！私のことを言っているのだ。私があの人を売ろうとたくらんでいた寸刻以前までの暗い気持ちを見抜いていたのだ。けれども、そのときは、違っていたのだ。断然、私は、違っていたのだ！私は清くなっていたのだ。私の心は変わっていたのだ。ああ、あの人はそれを知らない。それを知らない。違う！違います、と喉まで出かかった絶叫を、私の弱い卑屈な心が、唾を飲み込むように、飲み下してしまった。言えない。何も言えない。あの人からそう言われてみれば、私はやはり清くなっていないのかもしれないと気弱く肯定するひがんだ気持ちが頭をもたげ、とみるみるその卑屈の反省が、醜く、黒く膨れあがり、私の五臓六腑を駆けめぐって、逆にむらむら憤怒の念が炎をあげて噴出したのだ。ええっ、だめだ。私は、だめだ。あの人に心の底から、嫌われている。売ろう。売ろう。あの人を、殺そう。そうして私とともに死ぬのだ、と前からの決意に再び目覚め、私は今は完全に、復讐の鬼になりました。あの方は、私の内心の、再び三たび、どんでん返して変化した大動乱には、お気づきなさいることのなかった様子で、やがて上衣をまとい服装を正し、ゆったりと席に座り、実に青ざめた顔をして、「私がおまえたちの足を洗ってやったわけを知っているか。おまえたちは私を主とたたえ、また師とたたえているよ。うだが、それは間違いないことだ。私がおまえたちの主、または師なのに、それでもなお、おまえたちの足を洗ってやったのだから、おまえたちもこれからは互いに仲よく足を洗い合ってやる

12 【五臓六腑】腹の中の全ての内臓。

ように心がけなければなるまい。私は、おまえたちと、いつまでも一緒にいることができないかもしれないぬから、今、この機会に、おまえたちに模範を示してやったのだ。私のやったとおりに、おまえたちも行うように心がけなければならぬ。師は必ず弟子より優れたものだから、よく私の言うことを聞いて忘れぬようになさい。」ひどくもの憂そうな口調で言っ、おとなしく食事を始め、ふっと、「おまえたちのうちの、一人が、私を売る。」と顔を伏せ、うめくような、歎なような苦しげの声で言いだしたので、弟子たち全て、のけぞらんばかりに驚き、一斉に席を蹴って立ち、あの人の周りに集まっておのおの、主よ、私のことですか、主よ、それは私のことですかと、罵り騒ぎ、あの人は死ぬる人のようにかすかに首を振り、「私が今、その人にひとつまみのパンを与えます。その人は、ずいぶん不幸せな男なのです。本当に、その人は、生まれてこなかったほうが、よかった。」と意外にはっきりした語調で言っ、ひとつまみのパンを取り腕を伸ばし、過たず私の口にひたと押し当てました。私も、もう既に度胸がついていたのだ。恥じるよりは憎んだ。あの人の今さらながらの意地悪さを憎んだ。このように弟子たち皆の前で公然と私を辱めるのが、あの人のこれまでのしきたりなのだ。火と水と。永遠に解け合うことのない宿命が、私とあいつとの間にあるのだ。犬か猫に与えるように、ひとつまみのパンくずを私の口に押し入れて、それがあいつのせめてもの腹いせだったのか。ははん。ばかなやつだ。だんな様、あいつは私に、おまえのなすことを速やかにせよと言いました。私はすぐに料亭から走り出て、夕闇の道をひた走りに走り、ただいまここに参りました。そうして急ぎ、このとおりに訴え申しあげました。さあ、あの人を罰してください。どうともかかってに、罰してください。捕らえて、棒で殴って素っ裸にして殺すがよい。もう、もう私は我慢ならない。あれは、嫌なやつです。ひどい人だ。私を今まで、あんなにいじめた。はははは、ちきしょうめ。あの人

20

は今、ケデロンの小川のかなた、ゲッセマネの園にいます。もうはや、あの二階座敷の夕餉もすみ、弟子たちとともにゲッセマネの園に行き、今頃は、きっと天へお祈りをささげている時刻です。弟子たちの他には誰もおりません。今なら難なくあの人を捕らえることができます。ああ、小鳥が鳴いて、うるさい。今夜はどうしてこんなに夜鳥の声が耳につくのでしょうか。私がここへ駈込む途中の森でも、小鳥がパイチュクパイチュク鳴いておりました。夜にさえずる小鳥は、珍しい。私は子供のような好奇心でもって、その小鳥の正体をひとめ見たいと思いました。立ち止まって首をかしげ、木々のこずえを透かして見ました。ああ、私はつまらないことを言っています。ごめんください。だんな様、お支度はできましたか。ああ楽しい。いい気持ち。今夜は私にとっても最後の夜だ。だんな様、だんな様、今夜これから私とあの人と立派に肩を接して立ち並ぶ光景を、よく見ておいてくださいまし。私は今夜あの人と、ちゃんと肩を並べて立ってみせます。あの人を恐れることはないんだ。卑下することはないんだ。私はあの人と同じ年だ。同じ、優れた若い者だ。ああ、小鳥の声が、うるさい。耳についてうるさい。どうして、こんなに小鳥が騒ぎまわっているのだろう。パイチュクパイチュク、何を騒いでいるのでしょうか。おや、そのお金は？ 私にくださるのですか、あの、私に、三十銀。なるほど、はははは。いや、お断り申しませう。殴られぬうちに、その金引っ込めたらいいでしょう。金が欲しくて訴え出たのではないんだ。引っ込めろ！ いいえ、ごめんなさい、いただきます。そうだ、私は商人だったのだ。金銭ゆえに、私は優美なあの人から、いつも軽蔑されてきたのだから。いただきます。私はしません、商人だ。卑しめられている金銭で、あの人にみごと、復讐してやるのだ。これが私に、いちばんふさわしい復讐の手段だ。ざまあみろ！ 銀三十で、あいつは売られる。私は、ちっとも泣いてやしない。私は、あの人を愛していない。はじめから、みじんも愛していなかった。

20

15

10

5

1 【ケデロン】エルサレムの東側にある谷。

1 【ゲッセマネの園】エルサレムからケデロンの谷を隔てたオリブ山の麓にある園。

はい、だんな様。私はうそばかり申しあげました。私は、金が欲しさにあの人について歩いてきたのです。おお、それにちがいない。あの人、ちっとも私にもうけさせてくれないと今夜見きわめがついたから、そこは商人、すばやく寝返りをうったのだ。金。世の中は金だけだ。銀三十、なんとすばらしい。いただきましょう。私は、けちな商人です。欲しくてならぬ。はい、ありがとうございます。はい、はい。申し遅れました。私の名は、商人のユダ。へっへ。イスカリオテのユダ。

〈出典 『太宰治全集3』(筑摩書房、一九八八年)〉

5

【著者】太宰治(だざいおさむ)

一九〇九(明治四二)年—一九四八(昭和二三)年

作家。青森県の生まれ。

【著書】『人間失格』『富嶽百景』『ヴィヨンの妻』など

5 【ユダ】イエス・キリストに選ばれた十二人の弟子の一人。

5 【イスカリオテ】ユダの異名。